

## 第5回指導者養成研修会 研修種目担当講師および講習概要紹介

### ☆ レクリエーショナル・ニュースポーツ

テーマ：楽しめるスポーツに出会っていない学生のための多種目体験

コーディネーター：師岡文男（上智大学・公益財団法人 日本レクリエーション協会理事・

NPO 法人日本フライングディスク協会会長）

講師：師岡文男（上智大学）

#### 講習概要：

スポーツが楽しいと思っただけで、体力差や年齢差がある人たちとスポーツを一緒に楽しむ方法が分からない学生に、誰でも楽しめるニュースポーツを人数・天候・施設などの条件に応じて1回1種目ずつ紹介し、楽しさと達成感を体験してもらおうと共に、仲間のために努力することで得られる喜びの体験を通して「生きる力」として生涯スポーツを楽しむ知識・技能・自信を身につけてもらうことを目標とする。（上智大学全学共通選択科目の紹介）

#### スケジュール：

3月9日（日）11:00～13:00 師岡文男

「フライングディスク（ドッジビー・ディスクゴルフ）」

3月9日（日）14:00～17:00 師岡文男

「フロアーボール、スポーツチャンバラ、シッティングバレーボール」

3月10日（月）9:00～12:00 師岡文男

「ゴールボール、ソフトペタンク、キンボール」

3月10日（月）13:00～17:00 師岡文男

「受講生による創作実習」「まとめ（その他のニュースポーツの紹介）」

## ☆ ラグビー

テーマ：ラグビーの文化的特性に触れる授業指導

コーディネーター：嵯峨 寿（筑波大学）、後藤光将（明治大学）

講師：斎藤武利（白鳳大学）、竹村雅裕（筑波大学）、田中充洋（明治大学）、  
早坂一成（名古屋学院大学）、廣瀬勝弘（鹿児島大学）、廣瀬恒平（国際武道大学）、  
溝畑 潤（関西学院大学）、山本 巧（防衛大学校）、和田浩一（フェリス女学院大学）  
五十音順

### 講習概要：

これまで2度にわたりラグビーを取り上げてきたのは、2019年のラグビーW杯を契機にラグビーの普及を図るだけでなく、これからのスポーツ実践に対しラグビー文化がいかなる貢献ができるかを共に考え、大学体育授業の新たなあり方と可能性を探るためでもありました。

東京五輪の開催決定を受け、ラグビー特有の理念でありフェアプレー精神、スポーツマンシップにも通ずる「ノーサイドの精神」が今後ますます注視されるようになるでしょう。これを見据え、「サイド」という視点からラグビーのプレー、ルール、技術、歴史、文化などについて学ぶことのできる実技と講義の授業例を紹介します。

まずは、教授者である皆様方に「ノーサイドの精神」の教育的意義について理解をより深めていただき、ラグビー以外の指導場面にも応用・導入していただけるようなヒント、手がかりをつかんでいただければと願っております。

ラグビーでは、ノーサイドの精神の具体的表現ともいえる「アフターマッチファンクション」が存在しますが、なぜそれがかくも大切にされ、いかなる条件のもとで成立しているのか、ラグビー文化について考究できる教材もいくつか用意しております。

研修プログラムは、以下に挙げる授業例をベースに構成・展開する予定です。

### 講義（各 40 分程度）

授業例. ラグビーにおける「サイド」と「ノーサイド」

授業例. 陣地・国土争奪というサイドの背景 ウェールズ対イングランドの場合

授業例. 「テストマッチ」とアフターマッチファンクション

授業例. クーベルタンとラグビー 近代五輪の父のパブリックスクール訪問

授業例. オリンピックにおけるラグビー 2016年五輪復活までの道程とW杯

授業例. クラブハウスにおける交流と社交 ラグビーのクラブライフ風景

授業例. ラグビーにおけるけがの発生と予防・対処 安全確保のための留意点

授業例. ラグビーにおけるキャプテンと審判 選手が審判へ抗議しないのはなぜか？

実技（各 60 分程度）

授業例. パス&ランとトライへ向けた展開

授業例. タグ・ラグビー 身体接触のないゲームを体験する

授業例. ゴールキック ラグビーにおける3つのゴールキック

授業例. トライを阻む技術と戦術

授業例. 密集肉弾戦 モール、ラック

授業例. ボールの争奪 ラインアウトとブレイクダウン

授業例. スクラム 組み方から人数を変えたバリエーションまで

☆バレーボール

テーマ：～仲間をつなぐ，ボールをつなぐ…さまざまな事を「つなぐ」バレーボール～

コーディネーター：村本和世（日本体育大学）

講師：松井泰二（早稲田大学），田中博史（大東文化大学）

講習概要：

2つのチームがネットをはさんで身体接触なくプレイできるバレーボール。それゆえ男女混合でも大いに楽しめる競技である。その競技特性を生かし安全にかつ楽しくプレイするためのエッセンスを基本プレイの習得から指導法段階的ゲームの進め方まで、実際の授業での進行方法など多面的に紹介する。「楽しい」バレーボールの実現により「つなぐ」ことが生まれ仲間とのコミュニケーションを高めることが目標である。

スケジュール

3月9日（日） 11：00～13：00 田中博史

「バレーボールの競技特性と導入手立て」

3月9日（日） 14：00～17：00 田中博史

「基本技術の習得とその考え方」

3月10日（月） 11：00～13：00 松井泰二

「バレーボールのグループ戦術や様々なゲーム」

3月10日（月） 14：00～17：00 松井泰二

「習熟度の違いによるゲームとその考え方」

## 体験種目担当講師および講習概要紹介

### ☆アダプテッド・スポーツ

テーマ：真の「Sport for Everyone」を目指して～アダプテッド・スポーツの理論と実践～

講師：内田匡輔（東海大学）

#### 講習概要：

「アダプテッド・スポーツ」という言葉をご存知でしょうか。この単語だけを聞くと、何か新しいスポーツができたのかとも思ってしまうかもしれません。

「アダプテッド・スポーツ」とは「ルールや用具を障害の種類や程度に適合（adapt）することによって、障害のある人はもちろんのこと、幼児から高齢者、体力の低い人であっても参加することができるスポーツ」を指しています。さらに、「アダプテッド・スポーツという概念は、障害のある人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境を問題として取り上げ、両者を統合したシステムづくりこそが大切であるという考え方」まで含めたものになります（日本体育学会アダプテッド・スポーツ科学専門領域 HP から）。

端的に言えば、スポーツとは具体的な活動を指し示す事が多くありますが、アダプテッド・スポーツには、対となる活動はないと言っても良いでしょう。「障害者スポーツがあるではないか」と言われる方もおられるでしょう。もちろんこれまでに障害者スポーツと呼ばれてきた、車椅子バスケットや車椅子マラソンは、このアダプテッド・スポーツの一翼を担う大きな存在です。

ですが、近年、発達障害への理解が進み、「障害」そのものが多岐にわたってくる中で、その実態に合わせた体育・スポーツのあり方を、教育、医療、福祉など様々な場面で模索する動きがあります。

考えてみれば、障害者スポーツと言われている競技は、当初、その運動を必要とする人たちの実態に合わせて創られたスポーツです。ですから、伝統的なアダプテッド・スポーツと呼べるのかもしれませんが。

本講習ではこのような「アダプテッド・スポーツ」の考え方そのものにふれ、体験してもらいたいと思っています。そして皆さんとこれまで行ってきた体育・スポーツの見え方や考え方をとらえ直す視点を持ち、これからの学生に必要な体育・スポーツはどうあるべきかを「大学」という場所から見つめてみたいと思います。

3月11日 9:30～11:30（午前）

9:30 講義「アダプテッド・スポーツとは何か」（75分）

10:45 実技「アダプテッド・スポーツの視点づくり」（45分）

3月11日 12:30～14:30（午後）

12:30 実技「アダプテッド・スポーツの教材の広がり」（90分）

14:00 講義「まとめ・質疑応答」（30分）

## ワークショップ担当講師および講習概要紹介

テーマ：大学教員就職ワークショップ

講師：小林勝法（文教大学）（公益社団法人 全国大学体育連合 専務理事）

ワークショップ概要：

国が進めた「大学院重点化政策」によって大学院生が増え、体育・スポーツ系の大学院生数は1200人を超えた。これは1970年当時の10倍である。この増加に見合うだけの大学のポストや就職先がないため、定職に就けず、不安定な生活を送る若手研究者が増えている。大学院修了後に就職のない者は、修士課程修了者の2割、博士課程修了者の4割を超えている。このような厳しい現状を踏まえて、キャリアプランを考える必要がある。本ワークショップでは大学教員職への就職について、教員公募の条件や状況、大学教員職への準備教育などについて概観し、教員採用側の団体とも言える(公社)全国大学体育連合の取り組みなども紹介したい。

科学技術政策としても、大学教員の流動性を高め、採用の公正さを確保するために教員採用は公募が望ましいとされてきているが、2012年の体育に関する調査によると、公募をしている割合は国公立大学が10割であるのに対し、私立大学で6割程度である。私立大学でJREC-INを利用しているのは約5割にとどまっているので、公募情報の収集にあたっては注意が必要である。学問には流行があるが、教員採用とはズレがあるので、大学院入学時に流行り教員採用も多かった領域が、大学院修了時には教員ポストが飽和して採用が激減するということもある。

大学院教育改革の一つとして、大学教員養成機能（プレFD）の強化が挙げられており、大学教員準備教育などの導入も見られるようになってきた。体育に関しては、体育学部などを卒業し、教職課程を修了していれば、教職教養や専門教養を持ち、教育実習も経験しているので、教育能力はある程度は担保されていた。しかし、最近では教員免許を持っていない大学院生が4割にも達し、採用側としては危惧している。他領域と同様のプレFDが必要になってきており、大体連は大学院生の研修も受け入れている。このワークショップでは、教育能力を高め、キャリア形成していく方法について考える。

テーマ：大学体育教員のキャリア形成とFD

講師：奈良雅之（目白大学）

ワークショップ概要：

大学教育の質保証の一環として、大学教員がその資質・能力を維持・向上させることは、重要視され

ている。その手段としてのファカルティディベロップメント（FD）活動は、2008年から大学設置基準により、その実施が義務化されている。今日、FD活動は、個人や所属組織・機関の単位での実施はいうに及ばず、関連する学・協会においても様々なレベルのものが実施されている。FD活動は、一般的に教育改善・開発という狭義の概念に基づいてとらえられがちであるが、研究、教育、社会貢献、管理運営といった幅広い専門的・汎用的能力の向上をねらいとする広義のFDという概念（有本章、大学教授職とFD 2005,東信堂）に基づく研修も実査されるようになってきた。大学体育教員が参加する研修会等は、現状では授業改善・開発等の教授力の向上を目的とした狭義のFD観による研修会が中心となっていることから、大学教員に求められる幅広い能力の向上を目的とした研修の機会は少ない。

さらに、大学教員に求められる能力は年齢や職階といったキャリア段階によって異なる。羽田（2011）は、大学教員の職階に応じて求められる能力が変化する点に注目し、日本の大学教員研究やFDに関する研究にはキャリア・ステージの視点が欠落してきたことを指摘している（羽田貴史、名古屋大学高等教育研究 2011,11;293-312.）。視点をキャリア教育に転じてみると、名古屋大学で行われている「大学教員準備講座」（夏目達也ら、大学教員準備講座 2010,玉川大学出版）や「実践的FDプログラム」（全国私立大学FD連携フォーラム 2011, <http://www.fd-forum.org/fd-forum/>）など、大学院生向けや新任教員向けの体系的FDプログラムも開発されるようになってきている。そこでは、教授能力開発を中心にしながらも汎用的技能も含む総合的な知識技能の研修が行われている。

本講演では、大学体育教員のキャリア形成を意識したFD研修の意義とその内容について概説するとともに、グループワークなどを交えながら体験的に理解を深めたい。

## 特別講演担当講師および講習概要紹介

テーマ：スポーツ活動における事故防止・安全指導

講師：武田将史（東京海上）

### 講演概要：

スポーツは心身の健全な発達に寄与し、またスポーツを通して人との関わりを創出することができるもので、社会に無くてはならないものであります。一方、スポーツそのものに一定の危険が内在しているため、特にその指導者は、スポーツを行う方がルールに従って活動するよう促すことや事故が起こりにくい環境を整備すること、また活動単位の事情をよく把握して安全指導を行うことが求められます。さらに、万が一事故が発生してしまった場合には、必要な応急処置などの対応を適切に行うことも必要です。

近年では、権利意識の高まりもあり、指導者がそうした注意を怠ったことにより、被害者やその遺族に事故の責任を問われ、高額な賠償金を負うケースが増加しています。

講演では、下記の内容により、指導者が留意すべき点を紹介させていただきます。

#### （１）実際に発生している事故のデータや具体例の紹介

全国に約1,000万人の加入者を抱えるスポーツ安全保険の事故データや具体例をもとに、どのような状況で事故が発生するのかを説明します。

#### （２）賠償責任の法的責任

次に、近年増加している賠償事故について、指導者が負う法的責任の説明を民法の条文を示しながら説明します。

#### （３）リスクマネジメント

最後に、リスクマネジメントの考え方について、対処方法をリスクの大小や発生頻度ごとに整理し、リスクに対して事前に行う対策と事後に行う対策をご説明します。

受講される皆様が本講演によって、少しでもスポーツ活動におけるリスクと事故防止・安全指導について理解を深めていただければ幸いです。